



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | Hans Küng, Menschwerdung Gottes                                                   |
| Author(s)        | 荒木関, 巧; Arakizeki, T                                                              |
| Citation         | 基督教学, 6, 31-40                                                                    |
| Issue Date       | 1971-07-12                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/46279">https://hdl.handle.net/2115/46279</a> |
| Type             | other                                                                             |
| File Information | 6_31-40.pdf                                                                       |



Hans Küng

# Menschwerdung Gottes

Herder, Freiburg, 1970, p. 704.

キュングはラッチンガーと共に信仰一致のための研究成果を発表しているが、この新著「神の人間化」は救済論の中の第一巻として出版されたものである。

副題として「将来のキリスト論のための序論・ヘーゲルの神学的思索への入門」(Eine Einführung in Hegels Theologisches Denken als Prolegomena zu einer künftigen Christologie)とあるが、この題に示されたように、ヘーゲルの弁証法的歴史観、絶対精神の弁証法的飛躍が西洋の精神史(——特に神学の中でも、キリスト論)にどのような影響を与えたかを考察し、これからの神学に新しいビジョンを与えようとしている。

この著作は、ヘーゲル生誕二百年を記念して、ヘーゲル(一七七〇～一八三一)におけるキリスト論の紹介を意図している。しかしわたしたちにとっては、キュング自身がどのようなキリスト論を持っているかという点に興味を持たされる。その点で、キュングの前著である「教会」が与えたような満足感をこの「神の人間化」に期待することはできないと思われる。キュングは、ヘーゲルの生立ちから晩年までの思想的発展、更にヘーゲル批判を年代順に紹介している。次に少しくその内容を抄約すると、

第一章「キリスト忘却」——一七八八年チュービンゲン大学の神学部に入學したヘーゲルが、ヘルダーリン、シェーリングなどを友とし、一七八九年のフランス革命に感激しながら学ぶ姿が描かれている。

第二章「イエスへの集中」——スイスのベルンに移り、三十一歳で教授資格試験に合格するまでの思想発展をのべている。——神と人間との結びつきは人間の倫理性から考えられ、その意味で「神の子」とよばれている。倫理が実践されるに依じて、受肉の段階も深まる。「神の

子」に対する信仰は人間そのものに対する信仰とみなされている。義認とは自己改革であり、愛の倫理は法の倫理とされている。キリスト教は民衆全体の宗教にはなりえず、私的宗教にとどまった——とのべる。

第三章「神人」では、一七九一年フランクフルトに移ったヘーゲルを、第四章ではイエーナで哲学の私講師として、神学から哲学へ転向するヘーゲルを描いている。

ヘーゲルはシェーリングと共に哲学雑誌を発刊し、フイヒテと対論する。シェーリングはフイヒテの主観的觀念論から脱して、自然科学の進歩を吸収しながら、存在の内在的根拠である「絶対」へと向かい、超越論的觀念論を主張する。又、ヘーゲルは宗教から哲学へ、愛と信仰から超越論的知識へ、理性的宗教から絶対精神へと移行する。

人間は仲介者を必要としない。なぜなら各人が仲介の過程を持つてゐるからである。各人に神人性がかくされている。この神人性をイエスのうちに見るのである。

第五章「思弁的キリスト論」——この章においては、諸形態における精神の現象を扱い、自然的意識から絶対

意識への発展を考察する。人間の意識は絶対を自覚する。世界を体験する (Er-fahrung) とは意識の内面化 (Er-innerung) のことである。精神が内面へと入っていくことである。ヘーゲルはイエスの史実を精神の発達の間から、「絶対」の発展として、神の人間化の過程として考察する。キリスト教が神の本質を啓示するといふとき、その啓示は神自体に弁証法があることを示しているのである。神の人間化は弁証法的過程の始まりである。実体が自己意識へ移行すること (史的人間化) と同時に、自己意識が更に実体へと発展することが教会の自己意識においてなされる。精神の共同体としての教会は神の人間化の結果である。キリストが死に、そして復活したが故に、教会は存在しなければならない。主体・客体という図式を絶対精神が超克する。理性の認識において主体と客体とは一つになる。認識の弁証法では愛が認識の下に位置づけられている。

第六章ではキリストを存在へ止揚するヘーゲル、法哲学 (一八二二) 研究のヘーゲルが描かれ、第七章「歴史におけるキリスト」ではヘーゲル哲学の影響が総括として

のべられている。

神は肉となってあらわれた。キリスト教はキリストを神として、神をキリストとして礼拝する。すべての人の救いは、霊をうけているキリスト者（教会）を通じてなされる。それは、外的出来事の内面化である。感性的媒介物を通じて理念の面影があらわれる。芸術は此岸と彼岸との和解であり、精神のあらわれである。美は観照における理念である。ヘーゲルが精神の歴史への止揚をのべたのに対し、キエルケゴールは歴史を瞬間として理解する。個人の一度かぎりの出来事を絶対精神の歴史過程に止揚することなく、キリストの実存として、たえず信仰のうちに実現しつづける。キエルケゴールは、実存の弁証法としてキリストへの信仰の絶対的逆説を示すのである。思弁的神人キリスト論はヘーゲルからダウブ、マアルハイネケ、ゲシエル、ビィデルマン、アントン・ギュンテルへと受けつがれていく。ハイデッガーは実存についての実存論的、時間的分析によってヘーゲルの時間概念を否定する。現実在 *Das Sein* に歴史性がどのよう

に規定する。カール・バルトとエミール・ブルンナーの弁証法神学は、キエルケゴールの思想を受けついでいる。

ヘーゲルの神人キリスト論は、フォイエルバッバにおいて人間論となり、そこにカール・マルクスの宗教批判を準備するのである。

第八章「未来のキリスト論のための序論」は、わたしたちにとって、新しい文献を知り、傾向をさぐる上で貴重な章である。ヘーゲルにとって神とは、不変的で固定化した存在ではなく、たえず生成発展する神であり、自己を無とし、世界となり (*Weltwerdung*) 人間となる (*Menschwerdung*) 神である。有限と無限、人間と神とが一致しているのが真の神であるという。キリスト論の問題は存在と生成、一致と多様性の問題として示されるのである。子の誕生は永遠存在の弁証法的動きである。創造、墮落、救済は精神が無になる過程として考察されている。

西洋の精神史はパルメニデス以来、存在の不変性を主流としてきたが、歴史性を強調し、生成発展を説くヘー

ゲルの弁証法によって、生成の哲学が促されるのである。勿論、十九世紀のニーチェ、ベルグソン、ホワイトヘッドやハイデッガーの哲学は、古代ギリシャのヘラクリッス哲学と同一ではない。存在の不変性と一致を生成よりも優れたものとしてみとめるギリシャ哲学が、キリスト教の神概念に影響を与え、神の「不変性、永遠性、遍在、全善、正義」の概念内容を貧弱にしまったことは否定できない。神の不変性は神の自由な働きかけを否定するものであってはならないし、永遠性とは無時間性のことではなく、生き生きと働きかける「現在性」のことであり、又、全善とは自由のうちに愛し、好む者に恵みを与える歴史的の神を表現するものでなければならぬ。正義は自然的秩序のみではなく、神からの約束と契約に基づく神の義の忠実さを表現するものでなければならぬ。

ギリシャ的、ヘレニズム的傾向において神の不変性が強調されると、神が苦しむということは不可能なことであり、一方、一致が強調されると、「みことばが肉になった」という事の人間性が軽視されて単性説におちいりや

すい。ギリシャ哲学によれば苦しみとは欠如であり、神には欠如がないから苦しむこともありえないということになる。しかし、神はキリストにおいて実際に苦しまれた。神は欠乏のためではなく、愛の充満のために、肉において苦しまれた。父と子とは苦しみにおいても一つに結ばれている。「苦しんでいるのはキリストのペルソナであって、神や神性ではない」という表現は、誤解を招きやすい。子は肉となったが、父と一つのものである。新約聖書では神は共に苦しむ神として現われるのである。子キリストは苦しみと死という面から父を啓示する。神の愚かさは人間よりも賢く、神の弱さは人間よりも強い（一コリント一二五）。十字架の死という人間イエスの出来事において、神の苦しみと死とが示されるのである。ルーテルはキリストの歴史的人間性を強調したが、あくまでも救済と関連し、しかも神性、人性という二つの本性の伝統的図式と、中世の信心深い雰囲気との中で考察したのである。

ヘーゲルは神の歴史性、イエスの歴史性を問う。この歴史観こそ、史的イエスについての歴史的、釈義学的問

題意識を芽ばえさせたのである。ヘーゲル自身は史的イエスの研究から理念、絶対精神の現実化としての「イエスの死と復活」へと考察を進めた。ヘーゲルに対して「史的イエス」のキリスト論が生まれる。この歴史批判の神学はシュトラウスやバウエルからチュービンゲン学派へ、更にヴェルハウゼン、ディベリウス、ブルトマンなどの自由主義的釈義学へと発展していくのである。

すべてを歴史的観点から考察する現代人にとって、キリストに対する信仰宣言も史的イエスに基づいているものとして理解される。「信仰のキリスト」は神話ではなく、イエスの歴史的事実に根拠を持つ。イエスはアウグスト皇帝の治下のパレスチナに生まれ、ポンチオ・ピラトの下で苦しみを受けた。イエスの史実から共同体の「キリスト」信仰を根拠づける傾向が一般的になっているが、キュングはこのような下からのキリスト論として次のような著作をあげている。

R. Slenczka, *Geschichtlichkeit und Personsein Jesu Christi. Studien zur christlichen Problematik der historischen Jesusfrage*, Göttingen, 1967.

D. M. Baillie, *God was in Christ*, London, 1951<sup>4</sup>.

P. Althaus, *Die christliche Wahrheit*, Gütersloh, 1958<sup>4</sup>.

W. Elert, *Der christliche Glaube*, Hamburg, 1960<sup>5</sup>.

W. Pannenberg, *Grundzüge der Christologie*, Gütersloh, 1964.

F. Gogarten, *Die Verkündigung Jesu Christi*, Heidelberg, 1948.

ders., *Jesus Christus Wende der Welt. Grundfragen zur Christologie*, Tübingen, 1966.

G. Ebeling, *Theologie und Verkündigung*, Tübingen, 1962.

ders., *Was heißt: Ich glaube an Jesus Christus*, Stuttgart, 1968.

カトリック神学の場合、キリストが護教論的に扱われてきたことや、聖書学と教義学との間にずれが生じたことのため、現代にふさわしいキリスト論が確立されているとはいえない。

ニケア公会議（三二五年）からカルケドン公会議（四五一一年）に至るキリストの神性・人性についての教義決定が、中世から現代までのキリスト論を固定化してしまっ

たのである。神人キリストにおける自意識、知識、至福直観の問題も神性、人性という図式の下に考察されたのである。キュングは、これからのキリスト論のために、歴史性を重んじた聖書学的キリスト論を強調する。教義に反対したり、教義不在のキリスト論であってはならないが、教条を超越するもの (Meta-Dogmatischen) でなければならぬ。このようなキリスト論は次に示す如く徐々にではあるが登場してきている。

K. Lehmann, *Auferweckt am dritten Tag nach der Schrift. Früheste Christologie. Bekenntnisbildung und Schriftauslegung im Lichte von 1 Kor 15. 3-5*, Freiburg, 1968.

Ch. Duquoc, *Christologie, Essai dogmatique. L'homme Jésus*, Paris, 1968.

オランダの神学は、キリスト論にも新風を送りこんでいる。一九六八年の神学雑誌には、「二つの本性に対する批判」、「イエスの神性への唯一の道である人間イエス」、「伝統的先在論に対する批判」などが載っている。(A. Hulsbosch, *Jesus Christus, gekend als mens, beleden als Zoon Gods*, in: *Tijdschrift voor theologie* 6 (1966),

250-272. E. Schillebeeckx, *De persoonlijke openbaringsgestalte van de Vader*, in: ibd. 274-288. P. Schoonenberg, *Christus zonder tweedheid?*: ibd. 289-306.) バルタザールは神の概念から出発せず、十字架の歴史の出来事をキリスト論の出発点とする (H. U. von Balthasar, *Mysterium Paschale*, in: *Mysterium Salutis III/2 Einsiedeln*, 1969, 133-326.)。十字架の出来事を未来のみではなく、過去へ、創造の時点にまで、更に子の神的存在のうちにまでさかのぼらせる。十字架のいけにえが小羊のいけにえとして永遠的な要素を持っているのである。愛の三位一体的生命において、バルツナ間の無我が前提とされる。自己を無とする愛が、更に神の子の受肉による救いの歴史をもたらすのである。

キュングは、ラーナーよりも聖書学的なバルトのキリスト論を高く評価している。バルトはキリストと救済論 (教会論) とを一つのものとし、キリストのペルソナとその業との間に分離を置かない。

下僕として仕えることが祭司としてのキリストのつとめであった。キリストは主であり、神でありながら仕

えるものとなられた。

人間は傲慢のため罪を犯すが、イエスにおいてゆるしをうける。聖霊の業によって神は罪人を義認する。聖霊は共同体を形づくらせ、キリスト者一人一人を信仰へとめざめさせる。

イエスはまことの人間であつた。神によってゆるされ高められた人間であつた。かれは王となつた。人間は怠惰によってイエスに対し罪を犯すが、イエスにおいて罪をゆるされ、聖とされる。聖霊は共同体を建設し、キリスト者を愛の人に作る。

イエスは神と人との一致、神人である。かれはわたしたちのゆるしを証言し保証する預言者である。いつわりの罪を犯す人間は、イエスにおいて罪のゆるしをうける。かれにおいて神の約束とよびかけがなされるのである。聖霊によって召命がなされるが、まず第一に共同体の派遣があり、ついで各人を希望へとよびだすのである。

ブルトマン、エルンスト・フックスの流れに立つユンゲルは同じブルトマン派のヘルベルト・ブラウンとバルト派のヘルムート・ゴルヴィッツァーとの論争に介入し、

神の存在が生成のうちにあることをのべる (Eberhard Jungel, *Gottes Sein im Werden. Verantwortliche Rede von Sein Gottes bei Karl Barth. Eine Paraphrase*, Tübingen, 1965)。神が生きておられるという事実を考え、生成における神の存在の位置づけを試みるのである、神の存在は歴史的といえる。神の自己啓示は歴史のうちになされるが、必然性によってではなく、恵みによる。ここにヘーゲルとの相違が見られる。神の存在を構成する自己肯定「ハイ」ということばを、他者との関係においてもくりかえす。この肯定によって他者を存在によび招くのである。これが神の恵みである。キリスト教は、神の死によって始まる。神の死は、ルーテルからチュービンゲン学派に受けつがれ、ヘーゲルによって弁証法的に捉えなおされ、現代の神学に再びその逆説的な意味を与えているのである。

キュングは、北森嘉蔵の「神の痛みの神学」を神の愛の逆説的表現として、又神の内的存在を感情の面から理解しようとしているものとして評価している。このことは、情緒を無視しやすい西洋の神学に東洋の神学が反省

を促しているといえる。日本の神学は、バルトの弁証法神学によって、神が人間になるという逆説的出来事を深く理解することができた。絶対的なものが歴史の中で有限的なものとなり自己を無にしたという愛の下降線は、愛による死の超克としての復活によって上昇線にかわるのである。

ラーナーは人間精神の超越的飛躍のうちにキリスト論を基礎づけようとする。最近、ラーナーとキュングとがキリスト論について論争しているといわれている。ここでキュングの「神の人間化」を位置づけるために、ラーナーの超越的人間論を簡単に紹介したい。四五年、カルケドンの公会議で、イエスが神性と人性の二つの本性を持ち、それらが混同したり、分離したりすることなく、一つのペルソナ、神のことは、すなわち主イエス・キリストのうちに一致しているという位格的結合が決議された。当時、精神の優越性を強調するストア派や靈魂の先在説などの影響から、キリストの神性を強調しすぎて人間本性を軽視する単一説の傾向があった。その反対に人間本性を強調しすぎて、心理的に二つの主体をみとめる

ネストリウスの傾向もあった。ネストリウスがマリアを「神の母」のかわりに「キリストの母」とよんだのはキリストの神性を否定するためではなかったといわれているが、アレキサンドリアのキリロスの反対によって、四三一年エフェゾ公会議で排斥された。この決定はカルケドン公会議の「位格的一致」の決議に影響を与えた。この決議はキリスト論の完成であると同時に、出発点でもあった。(Karl Rahner, *Problem der Christologie von heute*, in: *Schriften zur Theologie I*. Einsiedeln, 1962<sup>5</sup>, p. 169-222.) それ以来スコラ神学は、神性と人性との二つの本性が、神のことはイエスにおいてどのように一致しており、救済の業をどのように完成したか、自然と恩恵がどのように関係しているか探求し続けてきた。

ラーナーは受肉をキリスト論の出発点とする。神のことはの受肉としてのイエスのうちに、神と人類との歴史的頂点を見ている。(K. Rahner, *Zur Theologie der Menschwerdung*, in: *Schriften zur Theologie IV*. Einsiedeln, 1962<sup>3</sup>, p. 137-155. 高柳俊一「K・ラーナー神学における根本概念―受肉」(カトリック神学15号、一九六九)一

二七一―二六二ページ参照) 純粹現実有としての神は歴史の中に生きるわたしたち人間のために、「わたしたち」の神として、ご自身を贈り物とされた。神の自己譲与がイエスにおいて実現した。

① ラーナーは、神のことばの受肉のために人間精神の超越性への指向を前提としてあげる。人間存在は超越性に向かって開かれている。超越への飛躍は上からの呼びかけ、神の自己譲与によって、ペルソナの応答において実現される。この人間実存の根本的傾向をラーナーは従順能力とよぶ。人間精神の超越性は「ことばの聴き手」において論証されている。(K. Rahner Hörer des Wortes, neu bearbeitet von J. B. Metz, München, 1963.)

ラーナーは人間存在の超越論的性格を神人イエスの考察に用いる。人間そのものを哲学的に考察する先験的人間論が、史実から出発するキリスト論の前提とされている。史的キリスト論だけでは神話に墮する可能性が強いのである。神学が認識の学であることから、認識のために前提とされるものを先験的に考察しなければならな

い。神学は超越論的人間論でなければならない。(K. Rahner, Theologie und Anthropologie, in: Schriften zur Theologie VIII. Einsiedeln, 1967, p. 43-65, ders., Grundentwurf einer theologischen Anthropologie, in: Handbuch der Pastoraltheologie II/1. Freiburg, 1966, p. 20-38.) 人間が神に向かって自己を超越していくという可能性は、恩恵の必要性を否定するものではない。人間にとって神こそ最大の恩恵であり、神を受け入れることが救いである。創造によって生まれた自然界と、キリストの救いによって歴史のうちに実現した恩恵の世界とは、キリストにおいて一つのものとされ、世の救いの場として教会が与えられる。世と教会との一致点はキリストである。(K. Rahner, Grundsätzliches zur Einheit von Schöpfungs- und Erlösungswirklichkeit, in: Handbuch der Pastoraltheologie II/2. Freiburg, 1966, p. 208-228.)

② 人間の従順能力と共に、人間が互いに自己を伝えあい与えあうという相互交流が、キリストの受肉と救済との前提になっている。(K. Rahner, Der eine Mittler

und die Vieheit der Vermittlungen, in: Schriften zur Theologie VIII. Einsiedeln, 1967, p. 218-235. 高

柳俊一「現代神学における教会論的基礎と救済史的アプローチ」

(カトリック神学 14 号、一九六八) 四〇三〜四三六ページ参照)

神と人類との関係の歴史と人間同志の交わりの歴史、この二つの歴史が神的自己譲与によって一つになるが、これを受肉というのである。人間同志の交わりあい、相互交流があるとき、そこに神との出会いがあるといえる。

なぜなら人間同志の交わりは神の自己譲与のうちに基づくからである。相互交流は「愛」ということばによって置きかえることができる。すべての人が互いに愛しあうことができ、自己を与えあうことができるのは神の自己譲与としてのキリスト、神のことばの受肉に基づくのである。裏がえしていうと、人間同志の交わりと、神と人類との交わりの可能性が受肉の前提とされるのである。

ラーナーは人間の従順能力と相互交流とをキリスト論の前提としているが、精神と肉体、自然と恩恵というスコラ的問題から出発するため、スコラ神学批判にとどまらざるをえない。ラーナーの思索も又、精神を強調する

西洋精神史の中に位置づけられる。彼の、現代人の共通の信仰意識、感じ方を敏感に捉え、そこから教義学の諸問題に光を投げかけようとした先駆的役割を認めなければならぬ。人間存在に関する先験的、超越論的考察の後に、聖書に基づく歴史的キリスト論が構成されなければならぬのである。

(荒木 関 巧)